

[翻 訳]

『スペクテイター』(13)

——第116号から第125号——

門 田 俊 夫

第116号 1711年7月13日(金曜日)

【バジエル】

キューテロンは私に大きな声で呼びかける、
「ターユゲトウス、さあ獵犬どもを放ち、
獲物を追跡させるのだ」と。(ウェルギリウス)¹⁾

人間存在に思いを馳せている人たちは、心の至福は、何らかの行為をすることによって初めて達成できるのだということに気づいています。²⁾人間は誰でも、いかなる場所、いかなる状態に置かれても、常に積極的に何か自分が従事するものを捜し出すものなのです。私はバステューユ監獄に7年間幽閉されていたある紳士のことを耳にしたことがあります。この紳士は、幽閉されていた間、繰り返し繰り返し、部屋に小さなピンをばらまいては、またそれを回収し、大きな椅子の肘掛けにいろいろな形に並べて気晴らしをしていたということです。

サー・ロジャーについてはこれまでいろいろ触れてきましたので、その人となりについてはよく熟知されていると思われる読者のみなさんに、彼が若い頃地方にふんだんにある田舎の気晴らしはすべて体験済みだとお知らせす

1) ウェルギリウス『農耕詩』3.43-44.

2) キケロ『義務論』1.6.19.

る必要はありません。これらの気晴らしは田舎において初めて可能であって、都会では想像できないことなのですが、サー・ロジャーのような労を厭わない人物にとって非常に似つかわしく思われます。サー・ロジャーの手柄についてはいくつか以前にも触れたことがあります。彼は若い頃には、1シーズンでヤマウズラを40羽捕獲したことがありますし、毛ばり1本で何匹ものサケを釣り上げたことがあります。彼がキツネに対して並外れた敵意を抱いていたことで、近隣の人たちは絶えず彼に感謝と好意を寄せるのでした。彼は1年間でその地方全体で捕獲される量よりも多いと思われるほどの害獣をひとりで駆除した訳です。実は、ごく親しい友人には認めているのですが、サー・ロジャーは、キツネ狩りでの名声を確固としたものにするために、翌日のキツネ狩りのために、密かに他の州からキツネを数多く取り寄せ、夜中に放っていたということです。彼が狩猟に用いる馬は、この地方で最も優秀で十分な調教が施されたものでした。その馬は不幸にして数年前に杭で大怪我をして果樹園に厳粛に埋葬されたのですが、店子たちは今でも、その葦毛の雄馬をしきりに褒め称えています。

今では年を取ってキツネ狩りをしなくなったサー・ロジャーは、ビーグル犬とスピードを競わずのんびりと狩猟を楽しむために調教した猟犬を保有しています。彼はスピードの不足を犬の鳴き声の強度と調子で埋め合わせをしようとしています。彼はこの点では非常に好みがやかましいので、先日ある紳士からとても立派な猟犬をプレゼントされたとき、召使に非常に丁寧なお礼の言葉を述べ、お届けいただいた猟犬は確かに素晴らしい低音の持ち主ですが、今私が必要としているのはカウンターテナー（中高音）の犬なのだにご主人にお伝えしておいて欲しいというのでした。我が友人がシェイクスピアを読んだことがあるとしますと、彼はきっと『夏の夜の夢』のシーシェウスからヒントを得たのだと言えるのではないかと思います。

私の猟犬どもはスパルタ種なのだ。唇は垂れ下がり、
毛は砂色だ。耳は朝露を払うほど垂れ、膝はがっしりして
のどぶくろはテッサリアの雄牛のように豊かだ。

獲物を追いかける足は遅いが、吠え声はまるでさまざまな

鐘の音が響き合うように調和している。角笛に導かれて

これほど調和のとれた吠え声を発するものは他には知らない。³⁾

この種の気晴らしにとっても熱心なサー・ロジャーは、私がこの地にやって来てからもほぼ毎日これを欠かしたことはありません。私も昨日の朝、礼拝堂付き牧師さんから快適な鞍敷を借りて、狩りの仲間に加わりました。みんなして馬を進めていく途中で出くわす近隣の人たちのサー・ロジャーに対する好意的な表情を目にして、私はとても満ち足りた気持ちがしました。農夫の息子たちは、善良な老勲爵士のために入口を開ける役を嬉々として受け持つのでした。彼はそれに対してうなずき微笑みを浮かべながら、優しく父親や叔父の安否を尋ねるのでした。

屋敷から1マイルほど馬を進めて、ヒースの生い茂った広大な荒地まで来ると早速、獲物を狩り立てるためのやぶうちが始まりました。私は仲間から少し離れて見ていたのですが、やぶうちが始まってしばらくすると、ハリエニシダのやぶの中から野ウサギが1匹飛び出してきて私の馬のすぐ近くに姿を見せました。私はそのウサギに狙いをつけました。私はみんなに知らせようとして腕を伸ばしましたが、全くの無駄に終わりました。でも、私の異常な動きには常に何か意味があることを知っているサー・ロジャーが、それに気づいて私のそばにやって来て「野ウサギはどちらへ行きましたか」と尋ねました。私が返事をすると、彼はすぐに犬を集めて臭跡を追わせました。犬が走り去って行ったとき、誰かが仲間に「寡黙な紳士が「逃げた」と叫ばないのだから、犬が獲物を見つけ出したとしたら驚きだよ」と耳打ちしているのが聞こえました。

馬で生垣を跳び越えるのが嫌だった私は、小高い丘に身を寄せ、自分は猟犬の後を追わずに、狩猟の様子を眺めることにしました。ウサギがまっしぐらに逃げる、つまり、狩りをする人たちの言い方をすれば「一気に駆け抜け

3) 『夏の夜の夢』4幕1場123-129行。

る」のではなく、私としてはそうするのではないかと思っていたのですが、ウサギはくると向きを変え、私の陣取っている辺りを弧を描くように走り回るを見て嬉しく思いました。私には狩りの様子が手を取るように分かったからです。まず最初に、ウサギが走り抜け、そのすぐ後から犬が臭跡を追いかけるのです。私は同時に、何頭もの犬が犬同士の暗黙の了解である地位に従って、ある特定の犬にほかのすべての犬が服従している様子を観察して大いに楽しく思いました。ほかの猟犬たちが臭跡を失った場合、評判のよい老犬が一声発すると、どの犬も直ちにそれに従うのです。その一方で、新米の犬や「うそつき」との評判の立っている犬が吠えた場合は、無視されるのです。

逃げ出したウサギは、やぶに二、三度身を潜めた後、再び、最初の場所に姿を現わしました。犬も追跡します。そして白馬に跨った陽気なサー・ロジャーも店子や召使たちに取り巻かれながら、さかんに犬をけしかけます。ある人が私の所に近づいて来て、これまで後ろに控えていた老犬たちが先頭に立ったので、そろそろ狩りは終わりますよ、と声をかけました。その人の言う通りでした。獲物の野ウサギは眼下の広い空き地に追い詰められ、猟犬に取り囲まれたのでした。爽やかな天気、辺り一帯にみなぎる快適な気分、近くの山にこだまする猟犬の吠え声や狩りをする人たちの発する掛け声、さらには角笛の音によって、私の気分はとても爽快になったのは確かです。私は元々狩りは無邪気なものだと確信していますので、気楽に楽しんだ訳です。気にかかることが少しあるとすれば、それは疲労困憊し、今や敵の手中に陥らんとしている憐れなウサギのことでした。ここで、狩猟係が先頭に躍り出て、猟犬の群れの前に棒切れを投げ出しました。猟犬の一群は何時間も追跡してきた獲物をあと7、8メートルの所まで追い詰めて、今にも飛び掛かろうとしていました。だが、猟犬たちは、棒切れが投げ出されると、急に足を止めました。猟犬たちは相変わらず吠え続けていましたが、棒切れより前には進み出る犬はいませんでした。それと同時に、サー・ロジャーが進み出て、馬から降り、ウサギを手にししました。そのすぐ後で彼はウサギを召使に渡し、

命が持ちそうなら広大な果樹園に放つようにとの指示を出しました。どうやら、彼は捕虜を果樹園に放ち、捕虜はそこでとても快適な捕らわれの身としての生活を営んでいるようなのです。訓練の行き届いた獵犬の一群の行動や大きな気晴らしを与えてくれた生き物を殺すまいとするサー・ロジャーの優しさを知って、私は非常に満ち足りた気持となりました。

屋敷に引き返す途中で、私はパスカル氏のことを思い出しました。彼は「人間の悲惨さについて」という非常に優れた論考の中で、「私たちの偉大を求める気持は、ひとえに内省を妨げる大勢の人たちや用事に取り巻かれたいという気持から生じる。これは私たちにとって耐え難い考えである。」と述べています。⁴⁾パスカル氏はその後引き続き、気晴らしを求める気持も同じ理由からだと言っています。そして、彼は特に狩りに対しては厳しい見方をしています。「狩りによって気を紛らすことが出来ないとすれば、市場ではるかに簡単に手に入る取るに足らない動物のために、あれほどの時間と労力を費やすはずはない」と彼は言います。全神経を気晴らしに投入し、森で夢中になるとすると、これは至極もっともな考えです。だが、この運動にもっと賞賛に足る目的、つまり、「健康維持、要するに、精神を支えるすべての器官を正常な状態に保っておく」という目的を設定している人たちには当てはまらないのではないかと思います。ここで引用しましたこの比類のない人物がこの点に関してもっと寛大でありましたら、彼はもっと長命であったことでしょう。ところが、彼は若い頃研究に励み過ぎたため、体を壊し、長の患いをした後、40歳を前にして没してしまいました。⁵⁾ 私たちに伝えられている彼の全史は、気高い精神と苦痛と疾病との絶えざる闘いで成り立っているのです。

私自身のことを申しますと、サー・ロジャーの屋敷に滞在中は、週に2度

4) パスカル『宗教その他若干の主題についての思想』(1670) 第26章「人間の悲惨について」。この書は1704年に英訳され、アディソンの蔵書に加えられていた。

5) パスカルは1623年に生まれ、1662年8月19日に死亡した。従って、彼は正味39年と2ヶ月生きたことになる。

狩りに出掛けることにしています。そして、地方の人たちには、この種の適度な運動を、体調を整え健全な身体を保つための一種の治療術としてお勧めしたいと思います。

最後に、本日の紙面の内容に相応しい一節をドライデン氏から引いておきます。

そもそも医師が必要になったのは放蕩が原因だった。

不摂生が行き渡り、怠惰が医師という職業を元気付けている。

長命の先祖は狩猟によって食糧を確保した。

骨の折れる仕事をする事で神経は張り詰め、血液はきれいになった。

ところが、甘やかされた子孫は、

寿命はせいぜい70歳にまでに落ち込んだ。

お金にはかえられない健康を維持するためには、

医師にお金を払って嫌な薬を貰うよりも、

外に出て狩りをした方がましだ。

賢明な人は体調を整えるために運動をする。

神は必ずしも健康体を授けてくれなかったのだ。⁶⁾

第117号 1711年7月14日(土曜日)

【アディソン】

彼らはそれぞれ夢を紡ぐ。(ウェルギリウス)¹⁾

どちらか一方にくみするのではなく中立を保つべきだ、という考えがあります。誤解や先入観を抱かれないと思っている人は、結論を下さず曖昧にしておく必要があります。自分にとってどうしてもよい事柄で意見が二つに分かれる場合、最も無難な方法はどちらにもくみしないことなのです。

6) 「我が誉れ高き親族、ハンティンドンの郷土、チェスタートンのジョン・ドライデンに寄せて」73-74行、88-95行。

1) ウェルギリウス『エクロガエ(詩選)』8.108.

呪術というテーマについて考える場合、私はこの態度で臨みます。²⁾ ノルウェーやラップランド、さらには東インドおよび西インド諸島にとどまらずヨーロッパ各国を含む世界の各地に、呪術にまつわる話が存在していると聞きますと、呪術と呼ばれている悪霊との交渉が現実にあるのだと考えざるを得ません。だが一方で、この話がよく聞かれるのは無知でだまされやすい人たちがいる地域に限られるとか、こういった悪魔との霊的交渉をするのは、どちらかというと思慮分別の乏しい妄想に陥りやすい人たちだとか、その一方で時代を問わず常に存在してきたこの種のかたりや妄想のことを考えてみますと、まだ私の耳に入っていない何らかの確かな話を聞くまでは私の考えは保留したいと思います。要するに、この世にいわゆる魔女という人物が存在するかどうかという問題について考える場合は、私の考えは真っ二つに分かれているというか、(もっと腹藏なく言ってしまう) 一般的には呪術といったことは存在するし、これまでも存在してきたのだと思いますが、その一方で、具体例は私にはどうしても信じることは出来ないのです。

実はこの思索をすることになったのは、昨日遭遇したある出来事がきっかけだったのです。そこで読者のみなさんにその出来事について詳しく説明したいと思います。友人のサー・ロジャーと森の傍を歩いていましたとき、ある老婆から施しを求められたのです。老婆の風采を目にしたとき、オトウェイのつぎの描写を思い出しました。

行く手の狭い路地に、老齢で腰が二つになり、
干からびた棒切れを手にし、ひとりでブツブツとつぶやいている
しわくちゃの醜い老婆がいるのに気づいた。
目は血涙で真っ赤にただれており、
頭は麻痺して震えていた。手は萎えており、

2) 呪術に関するアディソンの随想は、1712年3月に行なわれた有名なハートフォードのジェイン・ウェナムの裁判の直前に書かれた。ジェイン・ウェナムは最終的には執行猶予となり赦免されたが、魔女として死刑宣告されたイングランドで最後の人物となった。

両肩からは身体を包むように、
縞模様のボロボロの布が垂れ下がっていた。

それで寒さを凌いでいるのだ。

その下の衣服はつぎはぎだらけで、
ぼろぎれは黒、赤、白、黄と色とりどり、

まるで多種多様な惨めさを物語っているようだった。³⁾

オトウェイのこの描写に思いを巡らせながら、目の前にいる老婆とを比較していますと、老勲爵士がこの老婆こそこの地方一帯で魔女だとの噂を呼んでいる人物であり、口元は絶えず動いているのだと、そしてまた、近所の人たちは信じないのだが、彼女の家には彼女を数百マイル移動させるしなやかな小枝は一本もないのだと教えてくれました。たまたま彼女がつまづくようなことがあると、彼女の前にはいつも十字架の形をした棒切れかワラがあるのでした。彼女が教会で何か間違いを起こし、時ならぬところでアーメンと声を出すと、人々は必ず彼女が呪いをかけているのだと考えました。彼女が財布を差出したとしても、教区内には彼女に愛着を覚える娘さんは一人もいませんでした。老婆の名はモル・ホワイトといい、この地方一帯には彼女にだまされたという架空の一種の自慢話が行き渡っています。乳絞りの娘がいつも通りにバターが作れない場合には、攪乳器の底にはモル・ホワイトがいるのです。馬が厩舎で汗をかいている場合は、馬の背にはモル・ホワイトが跨っているのです。野ウサギが猟犬から予期に反して逃げ出した場合、狩りをしている連中はモル・ホワイトのせいになります。(サー・ロジャーは言うのですが) それだけに留まらず、野ウサギに逃げられたような時には、モル・ホワイトが朝方外出していたかどうか確認するために召使を派遣する主人がいるとのことでした。

この話を聞いて、私は好奇心を掻き立てられましたので、友人のサー・ロジャーに、森のはずれの人里離れた場所にあるという彼女のあばら家に連れ

3) トマス・オトウェイ (1652-85) 『孤児』 (1680) 2 幕。

て行って欲しいと頼みました。二人してそのあばら家に入っていくとき、サー・ロジャーは私に目配せをして、入口のところに立てかけているある物を見るようにと合図しました。それは古びた箒でした。同時に彼は私の耳元で、炉端にうずくまっているぶち猫に目を向けるようにとささやきました。老勲爵士によれば、この猫についてもモル・ホワイト自身に負けず劣らずひどい噂があるのだということでした。この猫は、モルがいつも連れ歩いているとのことですが、これまでに口を開いたことは二度か三度で、普通の猫には出来ないいたずらを何度もしたことがあるとの評判が立っていました。

私は内心では一体どうしたら人間がこれほど惨めで醜くなれるのかということに関心が向いていましたが、その一方で、この老婆のことで少々当惑しているサー・ロジャーが、治安判事として、悪魔との交わりを避け、近隣の家畜に害を与えないようにと意見しているのを聞いて笑いがこみあげてくるのを抑えることが出来ませんでした。あばら家への訪問はとても満足のいく結果となりました。

屋敷に引き返す途中、サー・ロジャーが語るところによると、子供たちに針をのませたとか、娘さんたちに悪夢を見させたということで、モル婆さんが何度となく自分のところに引き立てられて来たことがあったということでした。また、この地方の人々は、彼や礼拝堂付き牧師さんのためになるなら、いつだって彼女を池に放り込んで魔女かどうか確かめてあげると息巻いているということでした。

その後で尋ねてみますと、サー・ロジャーはこれまで自分の耳に入ってくるこの老婆にかかわる噂に何度も信念がぐらつき、牧師から熱心に説得されなかったら、その都度、老婆を州の四季裁判所に出頭させるはめになっていたということが分かりました。

イングランドのどの村にもモル・ホワイトのような人物がいると聞いていますので、私はこの話にことのほか関心を寄せています。一般に老婆が毫碌して、教区の保護を受けざるを得なくなると、往々にしてその老婆は魔女にされ、辺り一帯に途方もない妄想やありもしない不安や恐ろしい幻想を撒き

散らすことになります。その一方で、邪なことには関わりのない哀れなその人物は、やがて自分自身に脅えはじめ、時として、老齢のためにおかしくなった空想が育む秘密の交わりというか関係を認める結果になるのです。こういった事情からしばしば他の人々から孤立してしまい、同情は寄せられなくなり、逆に人々に対して、病弱と耄碌によって人間性が損なわれている哀れなお年寄りへの敵意を吹き込むことになるのです。

第118号 1711年7月16日（月曜日）

【スティール】

さらに、彼女の脇腹には致命的な矢がささり、
彼女の心に痛ましい傷を残す。（ウェルギリウス）¹⁾

この快い田舎の屋敷では、屋敷の周囲の森に通じる心地よい遊歩道が数多くありますので、楽しい迷路を次々に歩き回っていると飽きることはありません。都会での生活に慣れている人にとって、地方の魅力はこの上なく素晴らしいものですので、平静さを失ってしまうほどではありませんが、通常の生活では考えられない一種の忘我の境地に見舞われます。水のせせらぎや風のそよぐ音や鳥の鳴き声にうっとりします。空を見上げたり、大地に目を落したり、辺りの景色に目を転じたりするたびに、新たな喜びの感覚にとらわれます。傍らを歩いている友人の声で、いつのまにか友人が例の寡婦と散策したことがある木立ちにさしかかっているのに気づきました。²⁾彼はつぎのように語ります。この婦人ほど理解できない人はいない。彼女は結婚する気があるのかないかさっぱり分からない。中でも一番厄介なのは、彼女が言い寄る人たちにはっきりした意向も伝えるでもなく、また追い払うこともしないことなのだ。自分の取柄を自覚している彼女は、怒りや絶望から生じる不都合な成り行き、つまり、尊重されなくなるという危惧を一切持たずに、

1) ウェルギリウス『アイネーイス』4.73.

2) この寡婦については第113号参照。

言い寄る人たちの優しい心遣いを受け容れるてしまうのだ。彼女は誰をも虜にしてしまう魅力を備えている。こういった魅力的な人物のことを絶えず一途に思いつめている人は、普段の生活で配慮が行き届かないことがあっても大目に見てもらえるに違いありません。実は、私は彼女は強情だと思っています。でも、一体どうしてそう思うのだろうか。彼女に近づくと必ず畏怖の念を覚え、尊敬の念に駆られて決意が鈍ってしまうほどの取柄が彼女にあるからだろうか。彼女の魅力が近づきたいこと、彼女を褒め称えるというよりも崇拜したくになってしまう自分を腹立たしく思う。私は彼女が不幸になってくれればいいと何度願ったことだろう。そうすれば彼女の役に立ってあげられるのだがと。また、彼女に負い目をもつことの苦しみを味合わせてやりたいとの妄想に駆られてどれほど悩んだことだろう。そうです、私は彼女のお陰で密かに惨めな生活を送ってきたのだ。あの油断のならない人非人の親友さえいなかったら、彼女は高飛車になることはなく、私に少しは好意を寄せてくれていたと思う。

この世では、何と言っても親友には警戒しなくてはならない（と彼は私の名前を口にしながら話を続けました）。親友ほど生意気な連中はいない。こういった連中に伺える非常に滑稽な点は、友の長所を自分の長所と勘違いすることだ。オレスティラは大変な資産家で不意を襲われる危険を抱えています。そこで、取るに足らないことにでも疑い深くなっています。特に新たに知り合いをこしらえたり、以前からの知り合いと親密になり過ぎないように気を配っています。彼女に気に入られているテミスタは、彼女の話し掛ける相手や彼女の話す内容に細心の注意を払います。被後見人つまり友が美人であると、親友は冷たい素振りを見せます。資産家の場合は、親友もまた保護者である友と同様に疑り深い振る舞いをします。こういう訳で、高貴な独身女性の多くは、事実上、自分では相手の男性のことを理解しないまま結婚することになります。彼女たちはまさしく「告げ口をする人」の言いなりになり、たいい男性のお供とお喋りが出来ると自分は束縛されてはいないと思い込み、当の本人のことは避けてしまいます。州の中には、親友を持っていない

女相続人は一人もいません。従って、ご婦人が心遣いを示されるのも、敬意を表されるのも、おもねりを受けるのも、すべて代理人を通してのことなのです。そのとき突然、「どうして、微笑みひとつ浮かべてくれないのです」と繰り返し執拗に語り掛けている声が聞こえてきて、サー・ロジャーは熱弁を中断せざるを得ませんでした。私たちが声がする方に近づいてみますと、生い茂ったやぶに到達しました。水の透明な池を挟んだ向こう側に、まるで不機嫌さを絵に描いたような娘が腰を下ろしていました。向かいに居るのは、サー・ロジャーの狩猟係ウィリアム氏でした。サー・ロジャーは「静かに、二人は恋仲だ」と私にささやきました。この狩猟係は水面に映った娘の影を真剣に見つめながら、「嗚呼、愛しい絵姿よ、水面で君が代わりを務めているあの麗しのお方がいないときでも、君さえいてくれるなら、私はいつまでも喜んでここに居るのだが。そうすれば、我が麗しのベティーは腹立たしい不幸なウィリアムのことにわずらわされなくてすむ。だが、残念なことに、彼女が去ってしまうと、君もまた消えてしまう。でも、せめて君が留まっている間だけは私に話し掛けさせて欲しい。最愛のベティーに言って欲しい、君もウィリアムも彼女次第なのだと。彼女がいなくなると、君もそうだが、私も滅んでしまうのだ。彼女が君を抹殺する積りなら、君を守るために私は水に飛び込む。私は二度と彼女自身を抱きしめることはないだろう。それでも、あなたは微笑みひとつ浮かべないで私の言うことに耳を傾けるのか。これでは余りにも残酷だ。」と語ります。彼はこのように言うや否や、水に飛び込むうとしました。これを見た恋人は驚いて立ち上がりました。その瞬間、彼は池を飛び越えて行き、彼女を抱きしめました。脅えから落ち着きを取り戻した彼女は、この上なく魅力的な声で、また不満気な調子で、「貴方は見事に入水するものと思いましたわ。でも、そうだ、貴方はスーザン・ホリデイに別れの挨拶をするまでは入水しないのだわ。」と言いました。狩猟係は熱烈な愛情を込め、彼女に顔を寄せ、優しく甘い忠誠の誓いを立てました。そして、「どうかケイト・ウィロウの言うことは信じないで欲しい。彼女は私からあなたのことを聞きたいものだから、意地悪く、作り話をするのだ。」と言いま

した。ほれご覧なさい、分かるでしょう、災いはすべて親友に原因があるのです、とサー・ロジャーは語りました。二人の邪魔はしないでおきましょう。彼女は正直な娘です。あの男も私が彼女の父親を大事にしているのが分かっているから、嘘はつきません。この件では私が間に立って結婚を急がす積りです。ケイト・ウィロウは過去には美人で頭のいい人だったのですが、この地域では一癖も二癖もある女性で通っています。彼女は、私にはあの強情な寡婦への希望を持たせます。彼女は近づいてくる誠実な男性みんなに軽々しく反応します。そして自分の器量に自惚れていますので、魅力が衰えるまでは自分のことを鼻にかけていました。今では、彼女は若い婦人が自分よりも思慮深くならないように邪魔するのを彼女の本分としてるのです。しかしながら、先日、この図々しい女はなんと、「サー・ロジャーと私は好一對に違いないわ。なぜって、二人とも愛する人から見下されているのだから。」と言ったのです。このあばずれ女が登場するところではどこでも大きな威力を発揮し、悪知恵を働かすのです。

とはいえ、私がこの女性のことをそしるとき、そもそも彼女を愛した私の方が間違っていたのかも知れません。彼女のことを思い出すといつも、若さがよみがえり、忘れていた情熱が戻ってきます。この苦悩があったお陰で私の振る舞いは穏やかになったのです。苦しみを味わっていなかったら、私はもっと違った人間になっていたことでしょう。物事を大目に見たり、好ましい気質がいろいろ身についたのも、おそらくは彼女の愛しい姿が私の心に残っているお陰なのだろう。かつて彼女のことに夢中になっていたことがあったのだと思うことで、私の気持は落ち着きます。かつての情熱が完全に癒されることはありませんが、私はそれを甘んじて受け容れています。内密の話ですが、私が少し奇抜な考えをするようになったのも、おそらくはこのことがあったからなのです。というのも、ごく真剣な話をしているときでも、私はついなれなれしく何か滑稽なこととか妙なことを言ってみんなを笑わせてしまうのです。あれこれ言いましたが、私はやはり彼女はとても素晴らしい女性だと認めざるを得ません。彼女が地方に滞在中は、乳絞りでなく、植

物について勉強します。また、彼女はガラス製のミツバチの巣箱を持っており、読書をやめて庭に出て、ミツバチの働く様子を観察します。彼女はあらゆることに通じています。彼女が私の友人のサー・アンドリュー・フリーポートと商業について論じ合っているのを聞くと、私は10ポンド提供するでしょう。そうです、どうか私の言うことを信じて下さい、彼女は一見とても無知に見えますが、決して愚か者なんかではありません。

第119号 1711年7月17日（火曜日）

【アディソン】

私は愚かだったが、帝国ローマは
マントヴァに似ていると思った。（ウェルギリウス）¹⁾

都会と地方を行き来する人が真っ先に抱く感想は、それぞれの生活の舞台で経験する人々のマナーの違いに関するものです。私の言うマナーとは、道徳ではなく振る舞いとか作法のことです。

まず第一に、行儀作法という点で生じているとても大きな変化を認めなくてはなりません。外見的な形式や儀礼を伴う丁寧な敬意とか謙譲とか服従を示す仕草は、そもそも、宮廷および都会で暮らす上流階級の人たちの間で生まれたものであり、お互いに礼儀正しく丁寧な言葉遣いで接することによって、（あらゆる場合に、遠慮なくありのまま振る舞っていた）地方の人たちと差をつけていたのです。社交におけるこういった形式は次第に多様になり、煩雑になりました。社交界ではそれがあまりにも窮屈になっていること気づき、その大半を顧みなくなっているのです。ローマカトリックと同様に、人と交際する場合に、虚飾と儀礼があまりにも足手まといとなったために、余分なものを削り、改革して本来の良識と美を取り戻す必要が生じました。そこで、現在では、行儀作法としては、のびのびした身のこなしとある程度奔

1) ウェルギリウス『エクロガエ（詩選）』1.19-20.

放な振る舞いがもてはやされています。社交界は自由で気楽になり、マナーは以前に比べて縛りが少なくなっているのです。愛想良く奔放に振る舞うことがもてはやされている訳です。要するに、行儀作法は、最も目立たないところで最も発揮されているのです。

これに対して、地方の上流階級の人たちを見てみますと、彼らは前世紀のマナーを守っているのが分かります。地方の人たちが都会の上流社会の流行を身につけたときには、都会の人たちはすでにその流行を反古にしています。つまり、都会の人たちは、以前宮廷に行き渡っており、今でも地方で流行している優雅な振る舞いは捨てて、元の自然な状態に近づいているのです。都会の社交界ではもはや過度の行儀作法は要求されません。ところが、地方の礼儀正しい郷土は、まるで一週間廷臣のご機嫌を伺うかのように、半時はお辞儀を繰り返します。席順等に関するきまりでも、公爵夫人たちの集まりよりも判事の奥方たちの集まりの方がはるかにうるさいのです。

地方でのこういった礼儀は、大体すぐ近くにある椅子に腰掛けたり、そのとき次第で、先頭を歩いたり最後尾を歩いたりする私のような人物には非常に煩わしいことです。先だって、一同が儀礼を気につけて、席順を決めかねているうちに、友人サー・ロジャーが準備した正餐が冷めきってしまったことがありました。それぞれの地位、身分の順に乾杯が出来るように、客人たちを選び分けて食卓に着かせようと苦心している友人の様子を見て、私は心から彼に同情しました。これまで儀礼には全くかぶれてはいないと思っていた誠実なウィル・ウィンブルでさえ、この点ではとても気を遣いました。彼は午前中ずっと釣りをしてお腹がすいていても、私への配膳が終わるまでは食べ物に口にしようとはしません。私たちが広間から出て行こうとすると、彼は走って追いかけてきます。昨晚、私たちが野原を散歩していたとき、彼は突然踏み段のところで立ち止まり、私が近づくまで待っていました。そこで、私がお先へどうぞと合図すると、彼は真剣な顔つきをして、そんなことをすればきっと地方ではマナーがなっていないと思われるに違いありません、と言うのでした。

行儀作法ということではもうひとつ変化していることがあります。それは社交界に関連のあることですが、私はこれは非常に特異なことだと考えています。これまでは、少しでも淫らに思えることはすべて慎み深く遠回しの表現をするのが、上流階級の人たちの特徴のひとつでした。その一方で、そういった上品な着想や表現を知らない無骨者は、素朴にありのまま飾らずに表現しました。おそらく、遠回しに表現するといった行儀作法が度を過ぎたものになり、社交があまりにも堅苦しく、よそ行きで、不自然なものになったのでしょう。そこで、社交は、(一般に、ある時代の偽善がつぎの時代の不敬に引き継がれるように)総じて元の過激な状態に逆戻りしているのです。その結果、現在では、都会の道楽者や特にフランスで磨きをかけてきた人たちの中には、非常に淫らで野蛮な言葉を遣い、無骨者でも聞けば顔が赤くなるような言い方をする人たちがいます。

都会の洒落者の間に行き渡っているこの種の恥ずべき作法は、まだ、地方には入り込んでいません。こういった理性を欠いたマナーは信仰心に篤い人たちや慎み深い人たちの間では受け容れられるはずがありませんので、かりに地方の紳士が取り入れても、その人たちは窮地に捨て置かれることになるでしょう。つまり、その作法は手遅れで、自分たちは才人や道楽者と同じように喋っていると思っても、周囲には淫らな無骨者とは映らないことになるのです。

以上主張してきました行儀作法に係わる二点は、振る舞いに関係することですが、三点目として服装に係わるがあります。この点でも、地方は非常に遅れています。地方の洒落者はまだ、名誉革命当時の流行を捨てていません。彼らは真っ赤なコートを羽織り、レースのついた帽子を被って馬に跨ります。一方、ご婦人方もまだ、頭飾りの大きさに相手を出し抜こうとしています。²⁾

ところで、現在西地区の巡回裁判に出向いている私の友人が、彼の出向く

2) 頭飾り、つまり、ヘアスタイルについては、第98号参照。

地方の流行について知らせてくれると約束していますので、その知らせを首を長くして待っているのですが、彼から手紙が届きましたら、いずれ機会を改めて、この主題について詳しく論じたいと考えています。

第120号 1711年7月18日（水曜日）

【アディソン】

彼らの心には神々しい魂が注ぎ込まれていると思う。

（ウェルギリウス）¹⁾

我が友サー・ロジャーは、私が彼の飼っている家禽に並々ならぬ関心を寄せているのを見かけると、とても陽気になります。私が鳥の巣をいじっていると二、三度、ニワトリの親子のそばで一、二時間動かないでじっとしているところは数回、彼に目撃されたことがあります。彼は、私がここの家禽はすべて熟知しているのだと言います。ある雄鶏を私のお気に入りだとも言います。そしてまた、彼はしばしばアヒルやガチョウも自分よりは私になついているとほやきます。

正直を言って、私は田舎の生活で初めて可能なこの種の自然界への思索を巡らせることに大きな喜びを見出します。私の読書傾向にも自然誌関係の著作が相当ありますので、この機会に、これまでに散見したいくつかの所見を思い出し、それを実際に自分の目で観察した結果に照らし合わせてみたいと考えます。動物誌から得られる動物にも神の摂理が働いているという主張は、私の考えでは反論の余地はありません。

動物それぞれの形状は種によって異なります。²⁾だが、筋とか筋繊維には少しも変化はなく、他の気質や特質に比べて、それぞれの動物の生活様式に固有のものとはなっていません。

生き物すべてに伺える最も強い欲望は、肉欲と食欲です。³⁾前者は種の繁

1) ウェルギリウス『農耕詩』1.415-16.

2) キケロ『神々の本性について』2.47.121.

殖、後者は自己保存に対する絶え間ない要請なのです。

親から子に代々伝えられていく子孫を残すために不可欠な親が子を世話する方法に関しては、種によって大きな違いがあるのには驚かされます。⁴⁾ 昆虫やある種の魚のように、成り行きで卵を産み落とし、それ以後は卵を顧みない生き物もありますし、ヘビやワニやダチョウのように、卵を産みつけるための巣を見つけ、そこに卵を残していくものもあります。また、卵を産み、それを温めてかえし、独り立ちするまでその面倒を見るものもあります。

巣の構造にしても、鳥の種によってそれぞれ独特のものになっており、種が同じだとすべて同じ型になっている原理を一体どのように説明したらよいのでしょうか。これは模倣ではあり得ません。なぜなら、カラスをめんどりに孵化させ、そのカラスには他のカラスの細工を見させないようにしていても、そのカラスのこしらえる巣は他のカラスと同様に、枝木を組んだものになるからです。また、これは理性でもあり得ません。なぜなら、動物に人間のような理性が授けられていれば、それぞれが企てる都合次第で、彼らのこしらえる巣も私たち人間の家のように種が同じであっても違ったものになるはずだからです。

動物に快適な暖を与える天候でも、木々や野原はそれぞれを保護するために葉や草を授け、そのことによって無数の昆虫は子孫を残すことができているのは注目に値することなのです。

親の愛情が子孫の保護にとって必要な間は非常に激しく、必要でなくなると消えるのも不思議なことです。

この持って生まれた愛情の激しさは、とても苛酷な実験によって例証され

-
- 3) 「神は私たちに二つの強い欲望を与えた。つまり、個の維持のための食欲と、種の保存のための性欲がそれである。もっと分かり易く言えば、前者は私たち自身が存続するためであって、後者は他者を世に送り出すためのものである。」(タトラー紙第205号) この欲望については、キケロ『義務論』1.4.11でも触れられている。
 - 4) この段落およびつぎの段落で述べられている例の多くは、キケロの『神々の本性について』2.47-52から引かれている。

ます。このことに関しては、私が優れた著作で知った例を詳しく引いてみたいと思います。ここで論じています動物の原理をこれほど効果的に示すものは他には見当たりませんので、残酷な例を挙げることにつきましては、どうか読者のみなさんは大目に見て戴きたいと考えます。「切開の得意な人物によってメス犬のお腹が開かれました。メス犬は激しい苦痛に耐えながら子供を一匹産みました。すると、このメス犬は子犬をすぐ舐め出しました。その間、痛みを忘れているようでした。子犬を親から引き離すと、メス犬はその子犬をじっと見つめ、悲しそうに吠えはじめました。これは自身の痛みというよりも子犬を失ったことからくる吠え声のようでした。」

獣類におけるこの持って生まれた親の愛情は、人間のそれに比べてはるかに強いものですが、神の取り計らいによって、親の愛情が注がれるのは子が必要としている間に限られています。子が必要としなくなると、親は溺愛を止め、子を独り立ちさせます。本能的に極めて注目すべき事柄ですが、親の愛情というものは、それが種の保存にとって必要とされる場合は、通常よりも長期間続きます。鳥類ではひなが自分で餌を取って食べられるようになると、親鳥はひなを追いかけていますが、巣立つまでや鳥かごに閉じ込められているとか、何らかの事情でその必要がある場合は、餌を与え続けます。

動物では子から親への生まれつきの愛情は認められません。これは種の存続にとって不必要な訳です。また、人間の場合でも、何代も続くからといって愛情が強くなる訳でもありません。家族間の愛情では、愛情や慈しみを注ぐ動機としては、安全とか利益とか生命というよりも、庇護とか偏愛の気持の方が強いからです。

懐疑的な人たちが動物には理性があり、動物に理性の存在を認めないのは人間の傲慢と偏見に過ぎないのだと論じているのを聞くと不思議に思われることでしょう。⁵⁾

獣類は自己保存や種の存続に直接関係のないところではその特性を明らか

5) 動物の理性については、ピエール・ペイル (1647-1706) が詳しく論じている。

にはしませんが、死ぬまでのあらゆる出来事に理性が顔を出すのです。動物はその時代に対しては人の子よりも利口なのです。⁶⁾だが、知恵が働く事柄は限られており、その範囲は極めて狭いのです。獣から本能を奪ってしまうと、分別は完全に無くなってしまいます。しばしば引き合いに出される例を挙げてみます。

めんどりは巣をこしらえるときには、非常に警戒して、人が通らず、騒音も邪魔も入らない場所を選びます。⁷⁾卵を産んで抱く場合には、とても大切なことですが、細心の注意を払って、卵全体が暖まるように何度も卵をひっくり返します。必要な餌を取りに行くために巣から離れるときには、卵が冷えて孵化できなくなならないように、卵が冷え切らないうちに必ずきちんと巣に帰って来ます。夏場には解放されて、一時に2時間以上は巣を離れますが、冬になって寒さが厳しくなり卵が冷えて孵化しなくなってしまうようになると、もっと熱心に面倒を見、巣を留守にする時間も30分ほどになります。ひなの誕生が近づくと、とても細かな注意を払ってひなが殻を破る手助けをします。ひなを風雨から守ったり、適切な餌を与えたり、自分で餌を取って食べる方法を教えるのは言うまでもありません。また、ひなが孵る通常の時間が過ぎてても孵らない場合は、巣を捨ててしまいます。上述の事柄に関しては限りなく知恵を働かせる鳥類は他にも沢山いますが、孵化で見られる化学的な作用は実に手の込んだものでしょう。

とはいえ、めんどりは表面上は(種の繁殖にとって欠かすことのできない)知恵は持っているものの、他の点を考慮してみますと、思考力というか常識はひとかけらも持っていません。白墨を卵と間違えて抱きますし、自分が産んだ卵の数が減っても増えても気づきません。また、自分の卵と他の鳥の卵の区別がつきません。だから、たとえ全く別の鳥のひなが孵っても、自分のひなと思って大事に育てることになるのです。自分あるいは自分たちの種の

6) この箇所は、「この世の子らはその時代に対しては、光の子よりも利口である。」(ルカによる福音書第16章第8節)を想起させる。

7) キケロ『神々の本性について』2.52.129.

存続に関心を払わないこういった事情を考えてみますと、めんどりはどうしようもない愚かな存在なのです。

私は、自然界におけるこのように理性が及ばず、限りなく理性を欠いている動物の本能ほど謎めいたものは他にはないと考えています。物質のどのような特質からもこれは説明がつきませんし、非常に奇妙な働きをしますので、知的能力だと考える訳にはいきません。私自身は、これは物体の引力の原理に基づいているものと考えます。つまり、これは物体固有の特性からは説明できませんし、また、物事の仕組の法則からも説明できないのです。要するにこれは、偉大な哲学者たちが考えているように、神の直観、つまり、神の力が生き物に及んでいることの証しなのです。⁸⁾

第121号 1711年7月19日(木曜日)

【アディソン】

みんなユーピテルのことでもちきりだ。(ウェルギリウス)¹⁾

今朝、友人のカントリーハウスの広大な庭を散歩していましたとき、めんどりが示した珍しい本能的な動きを見て私は非常に愉快に思いました。このめんどりはアヒルのひなを引き連れていたのです。²⁾アヒルは池を見ると、直ちに飛び込みましたが、継母のめんどりは、はらはらしながら池の縁をバタバタし、水からあがるように鳴いたのです。めんどりには水はこの上なく危険で死をもたらすものと思えた訳です。動物の種類によって異なるこういった原理原則を理性と呼ぶことは出来ません。これは私たち人間のあずかり知らぬ「本能」というしかありません。前号で少し触れましたように、私の考

8) ウィリアム・デラム『占星術神学』(1715)第6巻第1章、ならびにニュートン『光学』(1704)『プリンキピア』(1687)参照。

1) ウェルギリウス『エクロガエ(詩選)』3.60。

2) スペクテイター氏も当然この出来事を目撃した可能性はあるが、これはキケロの『神々の本性について』(2.48.124.)にも登場する。今号および次号の内容の多くもキケロに負っている。

えでは、これは神の直接的なお導き、つまり、物質を全て中心に向かわせようとする神のみわざなのだと思います。ベイル氏が獣類の魂に関する博学な論文で引用している現代の哲学者は、非常に大胆な言い方ではありますが、これと同意見を述べ、「神自らが獣類の魂だ」と語っています。³⁾動物それぞれに何が自分たちにとって相応しい食べ物であるかを教え、ごく自然に有害なものを避けさせている動物のもっともらしい知恵については、私たちには説明のつけようがありません。子羊は親の胎内から生まれ落ちるとすぐに、誰も教えないのに乳首に吸い付く、とキケロは述べています。⁴⁾ダンピアは、旅行記の中で、アメリカの見知らぬ海岸に投げ出された船乗りたちは、木の実がどれほど美味しそうに見えても、鳥がついばむのを観察して初めて手を出すのだと語っています。⁵⁾

ところで、動物には理性といったものではありませんが、下等な資質、つまり、熱情や感覚は十分に備わっているのです。注目に値することですが、獣や猛禽はすべて不思議にも怒りや悪意や復讐やその他の激情にさらされながら、自分たちに相応しい食べ物を探し求めます。また、自衛できない、つまり、他者を脅かすことができず、身の安全を確保するにはもっぱら逃げ出すしかない動物は、見聞きするものすべてに疑り深くなり、脅え、気を遣います。一方、人の役に立つ動物は、性質が穏やかになり、従順になります。そうすることで、家畜になる資格を獲得しているのです。このように、熱情というものは一般にそれぞれの動物の体のつくり符合しています。ライオンの激情からは、子羊のような弱々しく無防備なところは伺えませんし、柔らかな子羊から、ライオンのような戦闘や襲撃も想像できません。同様に、ある特定の感覚に鋭い知恵をつけ、それを最大限に活かして身の安全を守ってい

3) 原義 *Deus est Anima Brutorum* という言い回しは1700年10月のジャック・ベルナルの『文学界の情報』から引用されている。

4) キケロ『神々の本性について』2.51.128.

5) サー・ウィリアム・ダンピア (1652-1715)『新世界旅行』(1703年第5版) 1.39. ダンピアはイギリスの航海者・著述家で世界一周を2回行なった人物。

る動物もいます。

多種多様な武器について言及しない訳にはいきません。動物によって、身を守る武器はそれぞれ、つめ、ひづめ、角、歯、牙、毒針、鼻と異なっています。同様に、自然誌家たちからも、動物に武器の使用を教え、それを有効に利用させるいわゆる理性とは別個の何か隠された原理が働いているに違いないとの指摘があります。動物は、子羊の例で明らかなように、武器が形となっていなくても、その箇所を用いて当然のように自己防衛をします。子羊はかりに屋内で育てられ、他の羊を見る機会がなくても、角が生える前でも前頭部を用いて接近して来るものを押し返すのです。

こういった一般論に加えて、神の摂理に関して語っているロック氏の例を挙げてみたいと思います。ロック氏は生き物の中でも最下等と思えるものについて言及しています。「カキやザルガイには、人間やある種の動物に見られるほどの感覚が備わっているとは思えない。かりに備わっているとしても、居場所を移動できず、与えられた場所にじっとしている状態に満足しているのだ。あちこち移動できず、ある距離を置いて善悪を認める生き物にしてみれば、視覚や聴覚が備わっていたとしても無益だ。また、たまたま居場所を提供されて、その場所に留まり、水が冷たくても温かくても、汚くても奇麗でも、それをそのまま受け止める動物にしてみれば、機敏に動き回ることができても、迷惑なだけだろう。」⁶⁾

ロック氏の他にもうひとり、学識のあるモア博士から例を引きたいと思います。これはカルダーノを引合いに出したもので、神から不完全な状態にされているのですが、器官を形成する場合に不十分とはいえ知恵を発揮している動物に関することです。「ありきたりだが、モグラほど神の摂理が明白に顯われているものはない。モグラの器官はその生き方に実に見事に適合している。モグラに視力があると考えている自然誌家はおそらく皆無だろうが、何も見えない地中で生きるモグラは視力を奪われているのだ。だが、その償い

6) ジョン・ロック『随想』9.13.

として、モグラには敵から身を守るための、つまり、危険を察知する際立った能力が授けられている。要するに、モグラには並外れた聴力が備わっているのである。と同時に、尻尾と足は短く、幅の広い前足には鋭いつめがついている。このことが何を意味するかは明白だ。よく出来ていると感心せざるを得ない。これは、元はといえば、すべて地中を素早く動き回るためなのである。丸々とした胴体を移動させるためには、ひたすら土を掘る必要があるために、足は短くなっており、一度に土を大量にすくいだせるように、前足が幅広になっているのである。尻尾にしても、全くないか、あったとしてもほんの形だけの短いものになっているのは、生活の場が同類のネズミと違って、地上ではなく地中だからである。また、空気や水と違って厄介な土を相手にするために、長い尻尾を引きずっていると、危険なのだ。なぜなら、後ろから敵に襲われ、地中に逃げ切らないうちに、尻尾をつかまれ引き出されてしまうからだ。]⁷⁾

モグラについては、ボイル氏の所見に触れない訳にはいきません。私の記憶では、ボイル氏は彼の著作のどこかで、「(一般にモグラは盲目だと考えられているが) 全く見えない訳ではなく、物の区別がつくほどの視力が備わっていないだけである」⁸⁾と述べています。モグラの目には感覚がひとつだけ備わっているということです。つまり、モグラは光を感知し、それに苦痛を覚えるということなのです。もしモグラにその能力が備わっていないとすれば、つまり、光に苦痛を覚えてすぐに土の中にもぐらないとすれば、白昼に姿を見せた場合は絶えず敵に捕えられる危険にさらされます。全く見えないのでは命取りになりますが、視力がもっとよくても、モグラにとっては意味のないことなのです。

ここで事例としたのは下等な動物だけですが、もしこういった欠陥のある生き物にまで神の摂理が働いているとしますと、その他の動物に関する神の

7) ヘンリー・モア (1614-87) 『無神論に対する解毒剤』2.10.5. (1652)。カルダーノ (1501-76) はイタリアの自然哲学者・医者・数学者。

8) ロバート・ボイル 『自然界の物質の第一原因に関する論考』(1688) 60-61頁。

摂理については、生活条件の違いによってさまざまな能力を授けられているその多様性については計り知れないものがあります。

王立協会には是非ともこれまでの著作や観察結果をもとに一連の自然誌を編纂して戴きたいと考えます。⁹⁾その際、執筆者がそれぞれ担当分野を決めて、誕生、成長過程、器官の特徴や敵対関係および親和関係、とりわけ他の動物との違いなどを明確にしてもらえると、この研究は人類にとって大いに資することになり、執筆者たちも少なからぬ賛辞を受けることになるのは間違いありません。

なるほど、学者たちによる論考はいろいろあるのですが、こういった自然誌の分野に関しては、非常に不足しており、完全とは言えません。海や砂漠には明らかになっていない動物が無数に存在しています。「寂しい荒野」や「大きな淵」¹⁰⁾には、私たちのあずかり知らぬ数え切れないほどの手練手管が施されているのです。そのほかにも、裸眼で捉えられないほど小さく、顕微鏡でしか見えない生き物も無数にいます。しかしながら、私たちの知っている動物のことを考察するだけでも、すべての創造物に同様にさまざまな知恵や長所が備わっており、それぞれの持ち場で安全に生存していることが容易に想像できます。

キケロは『神々の本性について』第2巻で自然誌について、実に見事な梗概を披露しています。しかもこれは隠喩が散りばめられた文体で書かれていますので、凡人の手にかかるとしばしばからかいと嘲笑の的にされがちな内容なのですが、大変高尚なものになっています。¹¹⁾

9) 王立協会については第10号でも触れられている。この協会は1660年にボイルたち12名で発足したが、正式に王立協会(ロイヤル・ソサイアティー)となったのはチャールズ2世の勅許状がおりた1662年のことだった。

10) 前者は『申銘記』32.10、後者は旧約聖書(創世記7.2や詩篇36.6など)によく登場する表現。

11) キケロ『神々の本性について』2.47-52。

第122号 1711年7月20日（金曜日）

【アディソン】

旅には愉快的仲間と馬車が欠かせない。

（プブリリウス・シルス）¹⁾

私たちは人間として、まず第一に自らの心を傷つけないこと、そしてつぎに世間の非難を浴びないように心掛けなくてはなりません。もし後者が前者に抵触する場合は、それは完全に無視した方がよいでしょう。だが、誠実な人にとって、人々の称賛に支えられた自らの姿を見ることほど大きな満足感を与えてくれるものは他にはありません。つまり、自らの振る舞いが周りの人たちから保証され、認められますと、その人は自らの行為に自信を持つことになる訳です。

尊敬すべき我が友人サー・ロジャーは、心の中が安らかであるだけでなく、周囲の人たちからも敬愛されているそんな人物の一人です。人々に対する彼の博愛の心は、それに相応しい賛辞を獲得しています。近隣の人たち全員から、愛情と善意が返って来るのです。先だって、私はこの善良な老勲爵士に大きな敬意が払われる面白い例を二、三目撃しました。それはウィル・ウィンプルと私が、巡回裁判に出掛ける彼のお供をした時のことでした。裁判所に向かう途上で、ウィル・ウィンプルが私たちの前方を行く平民二人に追いつき、しばらく彼らと言葉を交わしました。この三人が話をしているとき、サー・ロジャーが私にこの人たちがどんな人物か教えてくれました。

サー・ロジャーによると、「スパニエル犬を従えている人物は、誠実で、年収が100ポンドほどある自由土地所有のヨーマンなのだ。彼は狩猟法を遵守し、野ウサギやキジを狩猟する資格が与えられている。²⁾彼の家の食卓には、週二、三度、狩猟の獲物が載る。そこで、彼ほど収入のない家よりも安上が

1) プブリリウス・シルス『格言集』116.

2) 第2号参照。この年の5月16日に、上院の狩猟法修正案をめぐって下院で審議された。

りの生活をしている。ヤマウズラを大量に殺めるのが彼の唯一の欠点なのだ。要するに、彼はとても分別があり、射撃の腕前は飛ぶ鳥を落すほどで、³⁾小陪審の委員長を数回務めたことがある。」ということでした。

そして、「ヨーマンの連れは、誰であれ、ことごとく訴訟に持ち込んでしまうことで名高い気難し屋のトムという人物なのだ。彼の住む町では、誰もが彼から四季裁判所に訴えられたことがあるのだ。この人物はかつて厚かましくも例の寡婦を告訴したことがあるのだ。彼の頭の中は、訴訟費用や損害賠償金や不動産回復訴訟のことで一杯なのだ。長期間に渡って二人の誠実な紳士が垣根を壊して自分の土地に不法侵入したと争っていたが、最終的には、訴訟費用が払えなくなって、その土地を売却せざるを得なくなったのだ。父親から年間80ポンドの収入を譲り受けたが、敗訴も勝訴もあるのだが、相次ぐ裁判のために、今では収入は30ポンド足らずになっている。」ということでした。彼の生活はそのうちもっとわびしいものになるに違いありません。

サー・ロジャーが気難し屋のトムのことを喋っているとき、彼らが急に立ち止まり、私たちが彼らに追いつきました。二人がサー・ロジャーに敬意を表すと、ウィルはサー・ロジャーに、気難し屋氏との間で起った論争について話を聞いて欲しいと頼みました。どうやら、ウィルはある深みで行なった釣りの話をしたようです。そのとき、気難し屋のトムはウィルの話を最後まで聞かずに、某氏がその気ならその場所で釣りをしたことで告訴するだろうと言ったようです。サー・ロジャーは二人の言い分を聞いて、しばらく考えた後で、軽率には判断は下してはいないといった雰囲気、「どちらにも言い分がある」と言ったのです。二人ともどちらも間違っていなかったと分かりましたので、サー・ロジャーの裁断に満足しました。この話が終わると、私たちは裁判所へと道を急ぎました。

サー・ロジャーが到着したときには、すでに開廷しており、治安判事たち

3) アン女王時代には、飛ぶ鳥を落すいわゆる「立射ち」はすでに珍しくはなかったが、難しい技だと考えられていた。ましてや、馬上からの射撃は熟練を要した(トレヴェリアン)。

は全員着席していましたが、老勲爵士に上席を譲りました。サー・ロジャーはこの地方の名士として、その機会を捉えて、「閣下、ようこそお出で下さいました。」と裁判長に耳打ちしました。私はその場に法の執行に相応しい非常に厳粛な雰囲気が漂っていることを大いに嬉しく思いました。一時間ほど経過し、審理がまだ行なわれている最中に、サー・ロジャーが立ち上がって発言しました。私はそれを見て非常に驚きました。私は彼のことが少し心配でしたが、彼は非常に堂々とかつ大胆な意見を二言三言述べて、彼の務めを果たしました。

彼が立ち上がると、出席者一同は静まりかえり、サー・ロジャーが立ち上がったとのささやきが傍聴席に行き渡りました。彼の発言内容は特別どうといったところはありませんでしたので、読者のみなさんにわざわざご紹介するまでもないと考えます。私の見たところでは、彼が発言したのは、彼自身が裁判を仕切るといふよりもむしろ、地方での彼の名声を保つ意図があったのではないかと考えられます。

閉廷となると、紳士諸士がサー・ロジャーを囲み、我勝ちに敬意を表している様子、さらに、臆することなく裁判長に話し掛けたサー・ロジャーの勇気を称えながら遠巻きにしている平民たちの様子を見て、私は非常に嬉しく思いました。

裁判が終って帰って来る途中で、とても面白い出来事に遭遇しました。この出来事は、サー・ロジャーの知り合いみんながいかに彼に敬愛の念を降り注いでいるかの証しですので、無視する訳にはいきません。彼の地所の境界までやってきたとき、馬もそうですが私たちもひと休みするために、小さな宿屋に立ち寄りました。どうやら宿屋の主人はかつてサー・ロジャーのところで召使をしていたようです。主人はかつての主人に敬意を表するために、サー・ロジャーには知らせないで、宿屋の入口の看板としてサー・ロジャーの肖像を掲げたようです。そこで、サー・ロジャーが気づくまでの一週間、彼の顔が路上にさらされることになったのでした。この召使の軽率な行為はひとえに、自分に対する親愛の情と善意から生じたことだと分かっていたサ

ー・ロジャーは、この事実を知ったとき、少しやり過ぎだと言っただけでした。そのとき、宿屋の主人がほとんど意に介していないようでしたので、彼はもっと毅然とした表情で、こんなことは公爵以下の人物には畏れ多いことなのだ、加筆して顔を変えてしまいなさい、費用は私が持ってあげるから、と付け加えたのです。そういう次第で、サー・ロジャーの指示で、画家を呼び、頬ひげを付け加え、顔つきを少しいかつくして、サラセン人の顔にしたのです。もしサー・ロジャーが馬から降り立ったときに、宿屋の主人が、ご主人様のお顔はご指示通り変更を加えて、昨夜戻って来ましたと話しているのを聞いていなければ、こんな話は私の耳には入らなかったことでしょう。我が友人は、いつものように快活に、以上の顛末を教えてくれたのです。そして、その顔を室内に持って来るようにと言いつけました。その肖像画を見てみると、極悪さというよりはむしろ、陽気な表情が漂っていると言わざるを得ませんでした。確かに精一杯いかめしくにらみつけているように描かれています、どことなく我が友人を彷彿とさせていたのです。サー・ロジャーは、私がニコニコしているのを見て、変装しても私だと分かりますか、正直なところを教えて欲しいと言いました。最初、私はいつものように黙っていましたが、友人がサラセン人に見えるか、自分に見えるかと執拗に迫りますので、出来るだけ落ち着いて、「どちらとも言えますね」と返事をしました。

こういったサー・ロジャーの冒険心に満ちた振る舞いをあれこれ知ることが出来たので、本日はこれまでにないほど愉快な一日となりました。

第123号 1711年7月21日（土曜日）

【アディソン】

学問によって血統は洗練され、
おまけに、美德が精神を確固としたものにする。
一方、悪徳は、気高い血統を傷つけ、
父祖の刻印をも拭い去ってしまう。(ホラティウス)¹⁾

昨日、サー・ロジャーと一緒に戸外に出て新鮮な空気を吸っていましたが、召使を二人引き連れて、私たちの傍を全速力で馬を走らせていく元気潑刺とした血色の良い若者を見かけました。あの若者はどなたですかと尋ねますと、彼はこの近くに住んでいるかなりの資産家の紳士で、母親の愛情を一杯に受けて教育されたのだ、とサー・ロジャーが教えてくれました。サー・ロジャーによりますと、母親はとても立派な婦人なのだが、息子を甘やかし過ぎて、何の役にも立たない人物にしてしまったとのことでした。彼女は、性急にも、読書は目に悪いし、文字を書くとき頭痛になると考えたそうです。乗馬を覚え、銃を扱えるようになるとすぐに、若者は森に解き放たれました。友人の説明によると、要するに、彼はすこぶる健康だが、それ以外には何一つ取柄がないということです。つまり、人の本分がただ生きることだけだとしますと、彼ほどその道に秀でた若者はこの地方にはいないということなのです。

実は、ここに滞在するようになって、生家の資産を念頭において、それ以外の心得はすべて不必要だと考えたためか、お追従を言う召使たちに教え込まれたためか、また、教育に責任のある人たちに行き渡っている同様の愚かな考えのためか、家門の体面を保ち、家屋敷を後世に伝えること以外には全く役に立たない若い相続人の例を数え切れないほど見聞しました。

そんな思いに耽っていますと、しばしば私の耳にした二人の友人にまつわる話を思い出します。人物名は仮名にしますが、読者のみなさんにこの話を詳細にお伝えしたいと思います。事実というよりはむしろ小説のような話ですが、この教訓は有益だと私は考えています。

ユードクサスとレオンタインは実社会に出たとき、ともに財産はわずかでした。でも、二人とも良識と美德を備えていました。二人は幼い頃から一緒に勉学に励み、亡くなるまで友情関係が続きました。ユードクサスは初めて社会に出たとき、法廷の仕事に就きました。彼は生来の才能と後に獲得した能力

1) ホラティウス『頌詩』4.4.33-36.

を駆使して順調に出世し、最終的には相当な資産家となりました。一方、レオンタインは、あらゆる機会を捉えて、勉強と社交と旅行に精をだして、自らの向上に努めました。彼はあらゆる知識を吸収しただけでなく、ヨーロッパ中の高名な教授たちと面識を得ました。彼はヨーロッパの君主たちの関心事やそれぞれの宮廷の風習や流行にも精通し、『ガゼット』紙に載る著名人はほぼ全員直接話をしたことがあるか会ったことがあると言えるほどの人物になりました。要するに、レオンタインは人々と書物から得た知識をうまく融合させ消化しましたので、当代きっての洗練された人物となったのです。彼は、勉学と旅行に明け暮れている間も、ユードクサスとは定期的に手紙のやり取りをしました。ユードクサスはレオンタインから得た情報を持っていますので、裁判所の主だった人たちから大層喜ばれました。二人は40歳（カウリー氏によれば、²⁾この年齢は人生に待ったなしの年齢となるのですが）になると、若い頃の決意に基づいて、隠退して余生を田舎で過ごすことにしました。結婚も、二人はほど同じ頃でした。レオンタインは自分と妻の財産をあわせて、年間300ポンドの収入が上がる農地を購入しました。この土地は、数千ポンドで購入した友人ユードクサスの地所の近くに位置していました。ユードクサスには息子、レオンタインには娘がそれぞれ一人できました。二人は「父親」になるのもほぼ同時期でした。だが、レオンタインにとっては筆舌に尽くし難いほど悲しいことですが、（彼がとても大切にしていた）若い妻は娘を産んで数日後に亡くなってしまったのです。もし友人が毎日やって来て、励ましてくれなかったなら、レオンタインは悲しみに打ち克つことは出来なかったことでしょう。ある日、いつものように二人で親しく話をしているときに、レオンタインは自宅では娘に相應しい教育を施せないと考え、ユードクサスはユードクサスで、恵まれた財産を相続すると息子が知ってしまうと息子のためにならないと考えて、二人は子供たちが分別のつく年齢に達するまで、子供の交換をすること、つまり、男の子はレオンタインの息子とし

2) エイブラハム・カウリー（1618-67）『随筆集』10「先延ばしにすることの危険性」。

て、女の子はユードクサスの娘として育てることに話が進みました。最初、ユードクサスの妻は、息子がレオンタインの元で成長することに利点を見出せないし、自分の手でずっと育てたいと考えていましたが、そのうちに説得されて、夫たちの考えに同意しました。そこで、ユードクサスの妻は、女の子の名前はレオニーラと言いましたが、その女の子を引き取り、自分の娘として育てることになりました。二人の友人は、互いに、子供たちをととても大事に育てましたので、子供たちもそれぞれ、仮の肩書に過ぎない「父親」を心から愛するようになりました。レオンタインと暮らしている若き相続人は、名前をフローリオと言いましたが、自分の仮親をこの上なく敬愛していましたが、しばしばやってくるユードクサスのことも喜んで迎え入れるよう教え込まれていました。ユードクサスもまた、フローリオに対して、節度を守りながらも、血のつながった親としての愛情を降り注ぎ、彼から敬愛されるように努めました。少年は今では仮親の暮らし向きが分かり、自力で実社会にでなくてはならないことが分かる年齢に達しました。日に日にこの思いが強まり、好結果をもたらしました。彼はレオンタインが忠告するあらゆることに異常なほどの精力を傾注したのです。彼の実に優れた持ち前の能力は、非常に優れた相談役の後押しもあって、いかに早く発揮され、あらゆる分野において素早く向上していきました。大学で優秀な成績を修めた彼は、20歳を待たずに、法学院へと移りました。一般に、法学院では、その道の大家になろうと一生懸命勉強に励む学生はあまり目にはつきません。彼らは大家にならなくても、いずれ自分は莫大な財産を相続する身分だということが分かっているからです。フローリオの場合は、事情が違いました。彼にしてみると、年間300ポンドではレオンタインと自分が暮らしていくには不十分だったのです。そこで、彼は猛勉強をして、国の法律に対する知識をしっかりと身につけました。

読者のみなさんにもっと早くお伝えしておくべきだったかも知れませんが、フローリオは養父の元で暮らしていましたが、始終ユードクサスの家を訪れては歓待されていたのです。そこで、ユードクサスの家にいるレオニーラと

は幼い頃から顔馴染となっていました。単なる知り合いが徐々に恋心へと発展し、名誉と美德を教え込まれた彼の心を動揺させるほどになっていたのです。彼は莫大な財産を相続することになっている女性の獲得を断念しました。何か不正な方法を用いるくらいなら、死んだ方がましだと考えたのです。一方、素晴らしい美貌と際立った慎み深さを兼備したレオニーラもまた、フローリオに対して恋情を秘めていましたが、とても思慮深く振る舞っていましたので、フローリオには一切それと悟られることはありませんでした。フローリオは今では個人の資産を増やすのに相応しい仕事に従事し、地方で際立った存在となっていました。だが、彼の徳高く気高い心の中には、燃え盛る恋情が渦巻いていました。そんなとき、突然、レオンタインから明日田舎に帰って来るようにとの連絡が入りました。というのは、息子の名声をあれこれ耳にしたユードクサスがもはやこれ以上真相を隠しておくことが出来なくなったようなのです。フローリオが帰宅した翌朝、レオンタインは彼に、ユードクサスが君に何かとても重要なことを伝えたいそうだ、と告げて、涙を流しながら彼を抱きしめたのです。フローリオは近くにある広大なユードクサスの屋敷を訪れました。挨拶を交わすとすぐに、ユードクサスは彼の手を取り、私室へ連れて行きました。部屋に入ると、ユードクサスは秘密を、つまり、実は自分が本当の父親なのだ、これまでのことはすべて教育を考えたうえのことだったのだ、と打ち明けたのです。そして、話をつぎのように締めくくりました。「レオンタインへの感謝の気持を表すためには、お前が彼の娘と結婚するしかない。そうすれば、私が身元を明らかにしても、レオンタインはお前の父親である喜びを失わなくてすむ。また、レオニーラも今まで通り、私の娘でいられる。彼女の子としての親に対する敬愛の念は、見当違いとはいえ、非常に見上げたものなので、彼女は私が与えることが出来る最高の褒美を受けるに値するのだ。お前には広大な地所が自分のものとなる喜びが生まれる。生まれながらにしてそうだと知っていれば、そのありがたみは分からなかったに違いない。これを受けるに値するよう、これまで通り変わらず努力を続けるのだ。隣の部屋にお前の母親を待たせてある。彼女はお前に愛

慕の情を寄せている。彼女もまた、私がお前に明らかにしたように、レオニーラに真相を打ち明けているところだ。」フローリオはこの有り余る幸せに感極まって涙を溢れさせ、父親の膝にすがりつきキスをしました。そして、父親の幸せを祈って、無言のまま言葉では言い表せないほど深い愛情と敬意と感謝の気持を示しました。結論的には、幸福な二人は結婚し、ユードクサスの財産の二分の一が二人に分与されることになりました。レオンティンとユードクサスはその後も仲良く過ごしました。子供たちの教育に費やした心配りの当然の報いですが、彼らはフローリオとレオニーラの従順で情愛に満ちた振る舞いに包まれて、正当な報酬を受けることになったのです。

第124号 1711年7月23日（月曜日）

【アディソン】

大きい書物は大きい災い。（カリマコス）¹⁾

書物の形で著作を発表する人は、小冊子やパンフレットの形で発表する人に比べて非常に有利な立場にあります。書物の場合は、読者は本文に目を通す前に、月並みな文章で綴られた退屈な序文を読まなくてはなりません。序文を読み終わって初めて、何かを期待して分厚い書物に向かうことになるのです。そうです、著者は、一種の法則のようなものを確立しており、読者を時々退屈させているのです。²⁾非常に厳格な読者でさえ、大部の書物には休止や居眠りをする箇所が数多くあっても、それを大目に見るのです。そういった訳で、本日の題辞として、ギリシアの有名なことわざ「大きい書物は大き

-
- 1) カリマコス『断片集』359。カリマコスは紀元前3世紀頃のギリシアの文学者・詩人。アレキサンドリアの図書館長を務め、ローマの詩人にも大きな影響を与えたといわれる。
 - 2) デフォーは1711年8月18日の『レビュー』で、内容が面白いかわからないかはしばしば著者側というよりも読者側の問題だと指摘した。『レビュー』は1704年に創刊され、その後10年近くにわたって（週3回）発行されたデフォーの個人新聞。

い災い」を取り上げたのです。

これに反して、自分の考えを一枚一枚、いわば断片的な形で発表する人々には、一切こういった利点は与えられていません。この場合には、私たち作者は、直ちに主題に入り、書き出しから書き終わるまですべて生き生きとしたものに仕上げなくてはなりません。そうしないと、私たちの新聞は退屈で面白くないということで投げ出されてしまいます。内容自体が目新しいか、表現が素晴らしいものでなくては駄目です。もし優秀な著者の書物が、このようにして売りに出され、一頁一頁が4万ないし5万の読者³⁾の審美眼に付託されるとしましたら、単調な言い回しや平凡な意見や陳腐な話題や月並みな考えが数多くあるとって嘆くべきではないと考えます。とはいえ、助言や梗概が、時には途切れがちで不揃いな場合があるかも知れませんが、一頁一頁を一種の論文として扱い、大部の書物には欠けている考えが述べられていると考えて欲しいものと思います。つまり、随所にユーモアを取り入れながら、主題は非常に重要な論説で触れられているものを扱い、冗長な繰り返しや同語反復は避けてはなりません。凡人が道德について論じると、ガレノス風になり、薬は大量になってしまいます。⁴⁾随筆作家は化学的方法を実践し、読者には、数滴で水薬たっぷり一回分の効能を授けなくてはなりません。⁵⁾もしすべての書物をこのように真髄だけに絞込み込めば、現在流布している二折判の本のようなものはほぼ消滅してしまうことでしょう。完全に無視される無数の書物はさておき、一時代の著述を収納するには、書棚が数本あればすむに違いありません。

著者が新聞の形で自分の考えを伝えるのを躊躇しているのは、この種の新聞

-
- 3) 一紙を20名が読むとすると、これは第10号であがった数字よりも若干少ないが、売れ行きが落ち込んだという形跡はない。アディソンは、この記事の後の方で、需要が増えていると書いている。
 - 4) ガレノスは2世紀のギリシアの医者。「医者は自然の召使である」として摂生や訓練を重視した。
 - 5) ドライデンは悲劇（少量で効く強力な薬）と叙事詩（大量必要とする薬）を対比している（『アイネーイス』への献辞）。

聞を単独で出すのが困難だからだとは、私には思えません。もっとも、正直言って、新聞が、新聞の書き手や熱心な政黨員以外に大きく広まらないことに私は驚いています。新聞のこのような利用のされ方を見ていますと、まるで知恵や美德や政治について教授されること、つまり、良き夫、良き息子、良き顧問官、良き政治家になるように教授されることが、人々にとって無益なことであるかのようです。もし人々への啓蒙に多大の努力を払った古代の偉大な哲学者たちが、そうです、印刷術を手に入れていたら、彼らが人々に講義をする場合には、間違いなくそれを最大限に活用していたことでしょう。このように、大勢の人々に良識を広め、悟性を磨き、美德を吹き込み、憂いに沈んだ悲しみを和らげ、つまり、清廉な気晴らしでもって人々の気持ちをリラックスさせるには、新聞は大いに有益なのです。書物に熱中して書斎とどこか隠れ家に閉じこもっていないで、知識がこういった形で披瀝される、つまり、人々が集うところではどこでも話題にされることを私は願っています。そういった訳で、私はつい『箴言』のつぎの一節を思い出してしまいます。「知恵はちまたに呼ばわり、市場にその声をあげ、城壁の頂で叫び、町の入口で語る。思慮のない者たちよ、あなたがたは、いつまでも思慮のないことを好むのか。あざける者は、いつまで、あざけりを楽しみ、愚かな者は、いつまで、知識を憎むのか。」⁶⁾

(私には文の書き方からその人の人となり断言できるのですが) 男女それぞれ非常に分別をわきまえた人たちから、私の元へ数多くの手紙が寄せられています。そういった手紙を拝見していると、新聞の発行という現在の仕事の続行に大きな励みとなります。おまけに、書籍商からは、私の新聞を求める声が増しに大きくなっていると聞かされています。今後も、これまでと同様に、機知やオペラや道徳あるいはユーモアといったことにも触れようと思いますが、書籍商の勧めによって、今月末まではこのまま「田舎での思索」を続けたいと考えています。

6) 『箴言』第1章 第20節-第22節。

時折、私の新聞が審美眼や学のない人から無視されているのを見かけますが、私はそんなときでも一切屈辱を感じません。世間には、凡人がもてあましてしまうものが存在するものです。彼らは頭が鈍すぎて知識を受け入れて大きく前進することが出来ないのです。つまり、凡人の心を啓蒙することは出来ません。「暗闇が我々の友であり、先導者は絶望だった。」⁷⁾のです。

以上のことでは、モグラの寓話を当てはめてみなくてはなりません。モグラは視力をよくしようと、いろいろな眼科医に相談し、やっとのことで立派な眼鏡をこしらえてもらったそうです。ところが、いざ眼鏡を掛けようとすると、分別のある母モグラが、息子のモグラに、「眼鏡は人様の目には役立つけど、私たちモグラには何の役にも立ちませんよ」と言ったのです。⁸⁾という訳で、私は、モグラを相手に、新聞を発行しているのではないのです。

ところで、無知ゆえにモグラになっている者に加えて、妬みゆえにモグラになっている者もいます。「人は人にとって狼である」⁹⁾という古代ローマのことわざにありますように、一般的に、ある著者は別の著者にとってはモグラに過ぎないのです。彼らは他人の著述に美点を見出すことは出来ません。要するに、彼らには汚点や欠陥しか目に止まらないのです。実際、彼らはモグラと同様に光は分かっても、光を目にすると痛みを覚えて、直ちに目を閉じ、意固地になって暗がりに引きこもってしまうのです。私はすでに、こういった暗がりで密かに他人の名声を傷つけている害獣を二、三取り押さえていますので、自ら志願してモグラとなっている見本として、いずれ新聞に取り上げる積りです。

第125号 1711年7月24日（火曜日）

【アディソン】

7) ウェルギリウス『アイネーイス』2.360.

8) レストレインジ『道徳的な寓話』(1699) 172.

9) プラウトゥス『アシナリア』495。「人は人にとっては狼である」は「一人の損は他人の利となる」の意。

さあ息子たちよ、もう一度抱き合おう。

もうこれ以上、敵対してはならない。

国を子供たちの血で汚してはならないのだ。(ウェルギリウス)¹⁾

私が尊敬する友人サー・ロジャーは、話題が政党間の敵意のことに及ぶと、彼がまだ生徒だった頃に体験したある出来事のことをしばしば口にします。その当時は、円頂党と騎士党の確執が激化していた頃にあたります。当時、まだほんの青二才に過ぎなかったこの老勲爵士は、たまたまセント・アン・レーンへの行き方を尋ねたのです。²⁾すると、道を尋ねられた相手は、彼の質問には答えないで、彼のことを「カトリックの犬」呼ばわりをして、一体どこの誰がアンを聖人にしたのだい、と逆に尋ねてきたのです。少々困惑したロジャー少年は、つぎに出会った人にも同じことを尋ねましたが、そのかいもなく、今度は「坊主頭」と呼ばれただけで、道は教えてもらえず、アン様は自分が生まれる前からすでに聖人だったし、自分が死んだ後でもそうなのだ、と言ったのです。そこで、サー・ロジャーは、もうそれ以上同じ質問を繰り返すのは適当ではないと考えて、行き当たりばったり横町にぶつかると、横町の名前を尋ねることにしたそうです。彼はこのように機転を利かせて、どちらの党员をも怒らせることなく、目的地を探し当てたのです。サー・ロジャーはこの話の最後には、きまって政党への熱意が国に及ぼす悪影響に関する自分の意見を添えるのです。要するに、彼の考えでは、この熱意は善良な隣人を攪乱し、誠実な紳士を互いに敵対関係に陥らせるということです。おまけに、彼らは人々に公然と地租への偏見を植え付け、猟鳥類の絶滅を促しているということです。

1) ウェルギリウス『アイネーイス』6.832-3.

2) セント・アン・レーンはロンドン中央郵便局の南、つまり、ニューゲイトとオールダーズゲイトの間に位置し、現在はグresham・ストリートと呼ばれている。ピューリタンはアンを聖人に祭り上げることに反対した。これに関しては、サミュエル・バトラー (1612-80) の諷刺詩『ヒューディブラス』3.2.315-18でも触れられている。

国に降りかかる審判としては、分裂を煽るこの気質ほど最悪なものは他には見当たりません。国は二分され、人々は二つの別の国にいるよりもひどいありさまとなり、互いにそっぽを向き、相手を寄せ付けません。分裂は、共通の敵に立ち向かうという点において不利だけでなく、人々に互いに私的な悪意を抱かせるという点においても、取り返しのつかないほどの悪影響を与えてしまいます。これは人々の道徳および悟性の双方にとってもまた致命的です。美德を破滅させるだけでは満足せず、常識までも破壊してしまいます。

党派への熱狂的な忠誠心は、それが猛威を振るうと、内乱が勃発し、流血の惨事を導きます。またそれが極度に抑え込まれると、ごく当然のように、欺瞞、誹謗、中傷、そして不公正が渦巻くことになります。要するに、国には恨みや怨恨といったものが充満し、善良さ、同情、人間性といったものの種子はすべて消滅してしまうのです。

人間はたとえ敵であっても憎むべきではない、とプルタルコスが堂々と言いつけています。なぜなら、ふとしたきっかけからこの熱情にとらわれてしまうと、あらゆる機会に首をもたげて来るからだ、と彼は言います。つまり、敵を憎むと、敵意が心に住み着き、それが徐々に味方さらには関係のない人にまで及んで行くことになるということです。³⁾(憎しみという悪意は熱情そのものから生まれるという)格言の教えは、プルタルコスが記すほぼ百年前に示された例の規定⁴⁾に実に見事に符合しています。だが、ここでは、それにはこれ以上触れずに、大変嘆かわしいことなのですが、我が国の多くの善良な人々の心にまで巢食っている党派の原則について意見を述べてみたいと思います。理性や信仰の命令を全く相容れないほど、党派の原則は人心を互いに遊離させてしまっています。いったん徳高い人々が公共の大義に対する熱意に取りつかれてしまいますと、往々にして、一人一人の個人的な関心は消

3) プルタルコス『倫理論集』91C。

4) 『ルカによる福音書』第6章 第27節。「しかし、聞いているあなたがたに言う。敵を愛し、憎む者に親切にせよ。」

えてしまいます。

もしこの党派への熱意が道徳に悪影響を及ぼすとしますと、同様にこれは判断力にも大きな影響を及ぼすのです。私たちはしばしばお粗末で無味乾燥な新聞とかパンフレットが褒め称えられ、時として、立派な新聞が主義の異なる著者から軽んじられているという話を耳にします。この熱意に駆られてしまいますと、九分九厘、真の欠陥や美点を見分けることは出来ません。たとえ優秀な人物であっても、主義主張が異なると立場が違っていると、どれほど筋道が通って完全なものであっても、いびつで歪んだものとししか考えません。このため、我が国の名士はほとんど全員、互いに光と闇のように、二つの相容れない人格に従って行動していると言っても過言ではありません。現在階級や身分を問わず、我が国に広く行き渡っているこの奇妙な偏見によって、知識と学問は著しい被害をこうむっています。人々は従来、才能と習得した知識によって学会で名を成して来ましたが、今では、支持するそれぞれの党派への熱意と激情によって名を揚げるのです。書物に対する評価も同様です。口汚なく下品な文体が諷刺と見なされ、面白くもない党派の考えを述べたものが優れた著述と呼ばれているのです。

いずれの党派も双方が実践しているものに詭弁があります。これまでに言い触らされてきたことや一個人が捏造した中傷を疑う余地のない周知の真実と見なして、それを思索に値するものとして取り上げる訳です。通常、こういった恥ずべき物書きは、立証されたこともなく、しばしば論駁されてきた誹謗中傷を著述のネタとします。彼らは内心では、それが嘘であるか、どう見ても大変疑わしいと思っていても、まるで万人が認めている第一原理でもあるかのようにして著述にかかるのです。土台にこういった口汚ないものが据えられているとしますと、上部構造がそれに対応するのも無理はありません。もし現代のこういった恥ずべき慣例がこれ以上続くとしましたら、賞賛と非難はこれまでのように善良な人々の行動の原動力とはならなくなるでしょう。

どんな国でも、こういった非人間的な熱意が猛威を振るう時期があるもの

です。イタリアは長い間ゲルフ（教皇）党とギベリン（皇帝）党によって二分されましたし、フランスもまた、リーグ（カトリック同盟）をめぐって分裂したことがあります。⁵⁾だが、いずれにしても、こういった熱情が荒れ狂う時代に生まれ合わせた人は大変不幸せです。狡猾な連中の不断の功名心のせいで、国民は分断させられてしまいます。まことしやかに国を心配していると訴えかけられて、善意の人までが巻き込まれてしまいます。公共の大義に対する熱意のせいで、多くの誠実な人々まで情け容赦のない粗野な考えを持つに至っています。もういわべではなく真実を判断すれば、敬愛することになるはずなのですが、敵対する党派の人々に対してつい無慈悲で非道な仕打ちをしています。このように、本来非常に高潔な人までも、国を愛するという崇高な大義にそそのかされて、恥ずべき過ちを犯し、偏見を抱き、邪な人物になっています。ここでは、どうしても、「この世に馬鹿も悪党もいなければ、人心はひとつにまとまる」⁶⁾というスペインの有名なことわざを引いておきたいと思います。

私としましては、立場はどうであれ、共通の敵に立ち向かうために、すべての誠実な人が互いに手を取り合ってもらいたいものと心から願っています。中立の立場を取る誠実な人たちのグループが生まれると、党派にとって有益ですので、最悪の人たちは姿を消すことになるでしょう。また、彼らは一派閥のために手段を講じるような人たちではありませんので、無視されることもありません。どれほど手強く権勢を誇っていても、罪人はことごとく焙り出して追い詰めるべきです。一方、困窮している無垢や美徳は、どれほど軽蔑や嘲笑、妬みや中傷に取り囲まれていても、庇護し守るべきです。要するに、同胞をホイッグとトーリーと見るのではなく、優れた人を味方、悪党を敵と見なすべきなのです。

5) ゲルフ党とギベリン党は13世紀から15世紀にかけて反目しあった。カトリック同盟はアンリ3世の退位を謀って1576年にギーズ公が組織した。

6) このことわざは17世紀半ばにイギリスに伝わった。